

”歴史“ ”文学“ ”言葉“ が生みだす元氣都市

坂の上の雲をめざす 松山市

東京大学大学院 都市工学専攻教授 西村幸夫

元氣な都心、多様な境界

四国に行くたびに感心するのは中核的な都市がどこも都心に活気があるということだ。徳島、高松、高知、松山いずれもそうである。おそらくは城下町時代の都市の骨格がまだ健全で、都心に核となる商店街がうまく機能しているからだろう。とりわけ松山はさすがに四国随一の城下町だけあって求心性を今日もよく保っており、大街道から銀天街にかけてのアーケード街はその回遊できる規模と両端にある核となるデパートと相まって、典型的な二核一モールのひとつの理想的な都心商店街の姿を示している。

都市の中央部に松山城がでんと構えた独立の城山があり、その四周に市街地が広がるというやや変則的な都市のつくりであるが、むしろその地形的な個性をうまく活かしているといえる。市内のどこからでもお城を仰ぎ見るといふシンボルに対する位置関係によって、それぞれの地区が自己を規定するという、コンパクトでありながら個性が競演する魅力的な都市風景をつくりあげているのである。

たとえば、北の文教地区、南の業務商業地区、東のロープウェイ街周辺とさらに東の道後温泉街とはそれぞれまったく異なる顔を持つている。通りの景色を見ても、城北の平和通りの見事なイチョウ並木と南堀端通りの街路風景とは明らかに別物である。

き、つなぎ合わせていくまちづくりである。ロープウェイ街の景観整備事業もその代表的な例である。これは、2002年度から2005年度にかけて実施された電線類の地中化や商店街のアーケード撤去、ファサードの改修などの一連の事業で、これによって開放感あふれた連続的な商店街の町並みが再生された。

このほか、銀天街及び大街道のアーケードの大規模な改修(2000年、2002年)、道後温泉商店街のアーケードの改修(2006年)、松山市駅前広場の再整備や駅周辺の再開発事業による高品質のパブリックスペースの提供、坊ちゃん列車の復活(2001年)、道後温泉駅前の放生園内への大規模な足湯の設置(2002年)、道後温泉本館周辺の道路の石畳による歩行者専用への整備、地元メンバーによる秋山兄弟の旧邸の復元(2004年)など魅力スポットが育まれてきたのだ。さらに2007年4月にはこれらフィールドミュージアムのサテライトを束ねる本拠地ともいふべき「坂の上の雲ミュージアム」(設計安藤忠雄氏)が城山の南のふもとにオープンした。

まちづくりの文化的側面

坂の上の雲をめざしたまちづくりのもうひとつの側面は、これが単なるハード整備に止まらないことである。いやむしろ、ハード整備以前に坂の上の雲を見つめ、夢をめざして努力する小説の主人公たちの前向きな生き方に学ぶというソフトな文化運動的な面である。

この面でユニークなのは、松山青年会議所が中心となっている俳句甲子園だろう。こととして第10回目を迎えるこの全国高校俳句選手権大会は、全国の9地方大会を勝ち抜いた1校5名のチームに、投句応募審査で選ばれたチームが加わって8月に松山で

る。さらにはJR松山駅からお城へと向う大手町通りと松山市駅からお城へと向う花園町通りの風情は、同じ駅前通りでありながらひと味もふた味も違っている。

そしてこうした環状の市街地を一巡りするうちに市内電車が走り、さらにその外周を伊予鉄道とJRの路線が走っている。市内電車からの風景も決して一様ではない。路面電車の風情と、北側の住宅街の裏側を縫って走る軌道の風情とはまったく別の乗り物のようだ。なかでも見どころは、電車に乗って南堀端あたりから市役所前を、^が折りで県庁舎の威風堂々とした建物の前へ向うあたりで、この一帯のかっちりとしたシックセンターの街路風景の展開はスリリングでもある。

「坂の上の雲」をめざしたまちづくりと地域再生

松山はまた、正岡子規や高浜虚子、夏目漱石に代表されるように、文学や俳句など文学とのゆかり深い土地柄である。そしてまた司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』の三人の主人公、子規と秋山好古・真之兄弟の出身地であり、小説の舞台でもある。このことから、松山市では1999年度から「坂の上の雲」を軸とした21世紀のまちづくりに取り組んでいる。

これはひとつには松山全体をフィールドミュージアムに見立てて、各地区の魅力を生かすトーナメント形式による全国大会を戦うというものである。ここ5年間は地元四国の高校チームが全国制覇から遠ざかっているというほどの激戦が続いている。

ここで、ひとつ一行詩を紹介したい。「恋し、結婚し、母になったこの街で、おばあちゃんになりたい!」

市役所の1階ホールなどに掲げられているこの感動的なライズもそうした松山市主催の文化イベントから生まれた。「21世紀に残したい、伝えたい言葉」の大募集(2000年度)で松山市長賞をとった作品である。

この心にしみる言葉は、作家で作詞作曲家でもある新井満氏の心を揺さぶり、2005年に即興で「この街で」という歌が生まれた。これはのちにCDとなり全国に発売されることになる。さらに同名の絵本詩集(文・新井満、絵・黒井健、2006年)も生まれた。こうした心のこもった言葉が人々へ力を与えるということ、そこからまちへのおもいが再生していくということがあり得るのだ。そのことをこの事実は如実に物語っている。ひとつの生き様は容器としてのまちなしではあり得ないからである。

こうした作品を迎え入れることができたのは、松山に色濃い文化的土壌があるからで、そのひとつの象徴が現在進められている「坂の上の雲」をめざすまちづくりといえるだろう。



西村 幸夫
にしむら ゆきお

東京大学工学部都市工学科卒業 同大学院修了
明治大学助手 アジア工科大学助教授
MIT客員研究員 コロンビア大学客員研究員
などを経て現職
専門は、都市計画、都市保全計画、市民のまちづくり論など
世界文化遺産の評価等を行う世界遺産記念協会(ICOMOS)前副会長 文化審議会専門委員
東京都景観審議会部会長 「たかはし町並み建築デザイン賞」審査委員長など
著書「都市保全計画」町並みまちづくり物語」など多数



いまだ青い天にかがやく一朶の白い雲をみつめて明治の若者を描いた司馬遼太郎の小説がテーマ 坂の上の雲ミュージアム



松山城を望むシックセンターと新型低床の路面電車



安政元年(1854)に復興した松山城天守櫓(国重要文化財)



電柱地中化 アーケード撤去に商店街が丸 ロープウェイ街



秋山好古 真之兄弟生誕地 弟をみつめる兄の騎馬像



市長賞の言葉の垂れ幕 ワンストップで好評の市役所総合窓口センター



明治の坊ちゃん列車が復活 観光に新しい魅力を生んだ 重厚な愛媛県庁舎前



明治期 俳句を甦らせた子規 松山市立子規記念博物館



道後温泉 皇族専用の又新館と本館(温泉施設初の国重要文化財)



道後温泉駅前 坊ちゃんカラクリ時計と足湯「放生園」



旧藩主 久松定謙 さだことの別邸 萬翠荘 現 愛媛県美術館分館



活気ある中心市街地 大アーケード街の大街道が健在



高島屋と三越 銀天街と大街道 典型的な2核1モールを形成